

卒業を直前にした介護福祉コースの学生の介護観と今後の不安

山下喜代美

東京福祉大学 社会福祉学部(伊勢崎キャンパス)

〒372-0831 群馬県伊勢崎市山王町2020-1

(2010年5月6日受理)

抄録:介護現場において、利用者の生活の質の向上が求められている昨今、利用者の生活の質の向上のためには、そこで提供されている介護の質が問われ、その介護の質はそこで働く介護職員一人ひとりの介護観に左右される。今回、卒業を直前にした学生にアンケート調査を行い、学生が介護をする上で大切にしたいと思うことや今後の不安等を明らかにし、大学での教育内容や卒業後に必要な支援について論考した。学生は、利用者の生活の質の向上につながる「個別性」や「生きがい」「生活の中の楽しみ」について、これらは介護する上で大切であると考えているが、それを職場で実践することは難しいと感じていることなどが明らかになった。本研究の結果は、介護福祉士養成課程において必要な介護について根拠をもとに説明する能力を高めること、また、離職につながる不安を早期に解消するための卒後教育が必要であることを示している。(別刷請求先:山下喜代美)

キーワード:学生の介護観、卒業後の不安、介護技術の教育、利用者の生活の質の向上

緒言

介護福祉士法の改正に伴い、介護福祉士の行う「介護」が「入浴、排泄、食事その他の介護」から「心身の状況に応じた介護」に改められた。さらに業務規定では、「個人の尊厳の保持」、「自立支援」、「認知症等の心身の状況に応じた介護」、「他のサービス関係者との連携」、「資格取得後の自己研鑽」が追加された。つまり現在、介護福祉士に求められているのは、利用者に対し一律の介護を提供することではなく、利用者個々に合わせた適切な介護を提供し、利用者の尊厳を守り、生きがいを持った生活を送れるように援助することである(福祉士養成講座編集委員会, 2005)。このように介護は、日常生活動作への補完的な援助だけでなく、生活全般を幅広くとらえ、対象者の人生そのものを左右するものである。つまり介護者の人生観や健康観、価値観によって利用者のとらえかたは変わり、その結果、介護の内容に差が生じることとなる。介護現場において、利用者の生活の質(Quality of Life:QOL)の向上が求められている昨今では介護の質が問われている。その介護の質を向上させるためには、介護福祉士一人ひとりの介護観が大きく影響するものと思われる。つまり、利用者のQOLは、介護福祉士一人ひとりが日常の生活支援の中で何を重要と考えるかで大きく左右されるのである。

2008(平成20)年度、T大学の介護福祉コースは完成年度となり、一期生が卒業を迎えた。4年間の介護福祉コースでの養成課程を経て、卒業を前に、彼らの介護に対する率直な気持ちを調査した。その目的は、介護に対して自分が今後大切にしたいと思うこと、そのことを就職先でできると思うかどうか、今後介護職に就くことへの不安等を知ること、学生個々の介護観を知り、またT大学における介護福祉士養成課程の教育の見直しや介護の質の向上に向けて必要なことが見えてくると考えたからである。

研究対象と方法

対象

2009(平成21)年度のT大学社会福祉学部介護福祉コースの4年生75名を調査対象とした。

調査方法

2009年2月18日、卒業生が一堂に集合した全国共通試験の終了後に質問紙によるアンケート調査を実施した。質問紙を配付し、記入後に回収した。

調査内容

調査項目は学生の今後の進路、介護に対する気持ち、今後

介護福祉士として就職しない者に対しては、⑨今後この資格を活かしていこうと思うかどうか、⑩その理由について質問した。

質問項目③、⑧については選択肢を用意した。その選択

肢の内容については、介護福祉士の役割、業務内容、養成課程における教育内容等を考慮し、おのおの16項目作成した。その中から③については2つ、⑧については3つ選択するようにした。④、⑥、⑩の理由については自由記述とした。

表1. アンケート用紙(2ページ)

5. これからあなたが就職する施設等では、あなたの大切にしたいと思う介護が、十分にできると思えますか。どちらかに○をつけてください。

思う 思わない

6. 5の理由はなんですか。具体的に書いてください。

7. これからあなたが介護福祉士として仕事をする上で、心配や不安に思うことはありますか。

ある ない

8. 7で「ある」と答えた方は、具体的にどのようなことですか、3つ選んで○をつけてください。

1 介護技術 2 利用者とのコミュニケーション 3 利用者の家族とのコミュニケーション 4 レクリエーション活動の援助 5 認知症の方への対応 6 医療行為 7 緊急時の対応 8 介護過程の展開 17 その他	9 疾患等医療的知識の不足 10 失敗や介護事故 11 介護従事者としての適性 12 職員との人間関係 13 交代制の勤務 14 施設の雰囲気 15 自分の健康状態(腰痛等) 16 経済面
--	---

9. 1で「いいえ」と答えた方に伺います。今後、介護福祉士の資格を活かしていこうと思えますか。

思う 思わない

10. 9 についての理由を教えてください

ご協力ありがとうございました。
東京福祉大学 社会福祉学部 専任講師 山下 喜代美

個人情報の保護

本調査は無記名回答としたが、今回の対象は介護福祉コース4年生であり、年齢の記述から個人を特定できる面もあるため、アンケート用紙からは年齢の記述を削除した。また、調査に同意を得られた者のみアンケート用紙の回収を行なった。

調査結果

アンケート回収率と就職先

アンケート回収率は94.7%（回答者数:75名中の71名）であった。介護福祉士として就職する者は55名(77.5%)、介護福祉士として就職しないものは16名(22.5%)であった。介護福祉士として就職する者の就職先の種別は特別養護老人ホーム33名(60.0%)、有料老人ホーム8名(14.5%)、老人保健施設6名(10.9%)、身体障害者療護施設0名(0%)、その他6名(10.9%)、不明・未定2名(3.6%)であった。

介護福祉士として就職する者について

1. 介護福祉士として、介護に従事する上で自分が大切にしたいと思うこと：26名(47.3%)が「利用者とのコミュニケーション」を選んだ。次いで「介護職員同士の人間関係」18名(32.7%)、「利用者の個別性」16名(29.1%)、「利用者の生きがい」13名(23.6%)、「日常生活の援助」12名(21.8%)、「利用者の生活の中の楽しみ」9名(16.4%)であった(図1)。

選んだ理由の主なものは、「利用者とのコミュニケーション」では、「利用者との信頼関係を築くことが一番の支

援でありそのためにはコミュニケーションが大切である」、「介護職員同士の関係」では、「チームワークがないとよい介護は提供できない」、「利用者の個別性」では、「利用者個々にニーズがあり一人一人と向き合っていきたい」、「日常生活の援助」では、「利用者の生活で必ず必要なことであり、介護をする上では一番重要である」、ということであった。

「利用者同士の関係」「リハビリテーション」「利用者施設の中での役割」を選んだ学生はいなかった。

2. 就職先で自分が大切にしたいと思う介護が十分できると思うか:「思う」43名(78.2%)、「思わない」8名(14.5%)、無回答4名(7.3%)であった。その理由について、「思う」では、「施設の雰囲気が良かった」、「施設長の話や施設の介護に対する考え方が良かった」、「思うと考えなければいけないこともできない」、「自分でがんばる」等である。「思わない」では、「古くからのやり方が強い」、「面接の時点でできないと言われた」等であった。

3. 就職先で自分が大切にしたいと思う介護が十分できると思うかで「思う」と答えた者(43名)を選んだ、(1)の介護に従事する上で自分が大切にしたいと思うこと：22名(51.2%)「利用者とのコミュニケーション」を選んでいた。次いで、「介護職員同士の関係」14名(32.6%)、「日常生活の援助」11名(25.6%)、「利用者の個別性」9名(20.9%)、「利用者の生きがい」9名(20.9%)であった(図2)。

4. (2)の質問で「できると思わない」と答えた者(8名)を選んだ、介護に従事する上で自分が大切にしたいと思うこと：6名(75.0%)が「利用者の個別性」を選んでいて。次いで「利用者の生きがい」3名(37.5%)、「利用者とのコミュニケーション」2名(25.0%)であった(図3)。

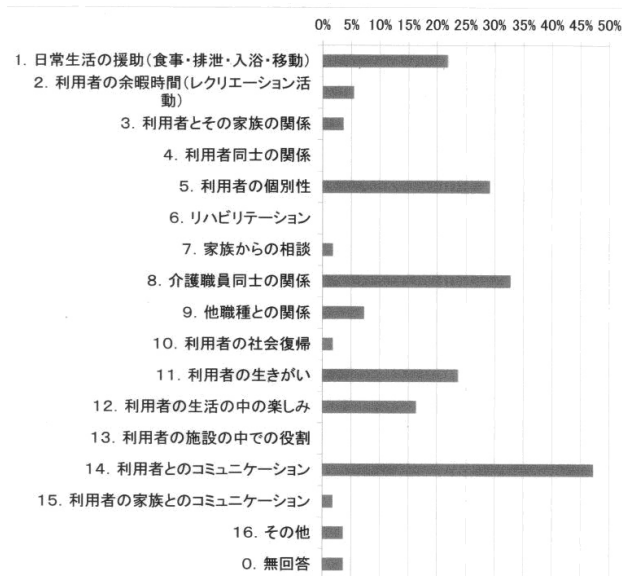


図1. 介護に従事するうえで自分が大切にしたいと思うこと(各自2項目を選択)

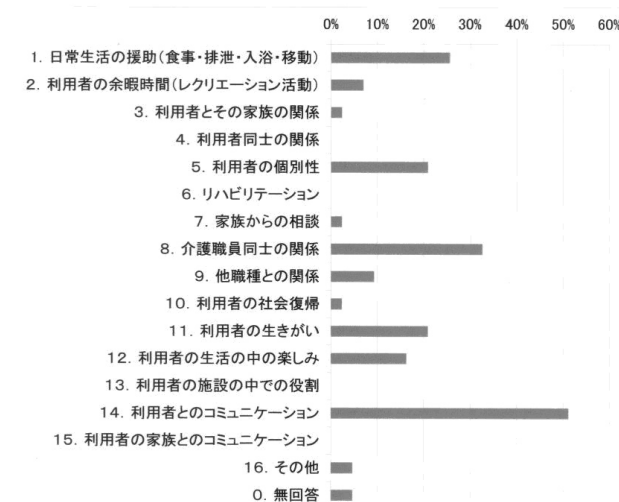


図2. 自分が大切にしたいと思う介護が「できる」と答えた学生が選んだ大切にしたいと思うこと(各自2項目を選択)

5. これからあなたが介護福祉士として仕事をする上で、心配や不安に思うことはあるか:「ある」は52名(94.5%)、「ない」は2名(3.6%)であった。

6. 心配や不安の具体的な内容について:「介護技術」30名(54.5%)、「職員との人間関係」27名(49.1%)、「緊急時の対応」20名(36.4%)、「失敗や介護事故」17名(30.9%)、「利用者とのコミュニケーション」11名(20.0%)、「疾患等医療的知識の不足」10名(18.2%)、「経済面」8名(14.5%)、「自分の健康状態」7名(12.7%)、「施設の雰囲気」5名(9.1%)があげられた(図4)。

介護福祉士として就職しない者について

介護福祉士として就職しない者は、16名(22.5%)であった。そのうち10名(62.5%)は「資格を活かそうと思う」と回答し、6名(37.5%)は「思わない」と回答した。

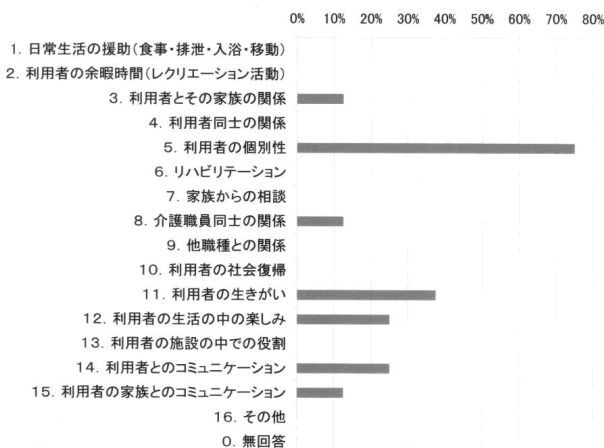


図3. 自分が大切にしたいと思う介護が「できない」と答えた学生が選んだ、大切にしたいと思うこと(各自2項目を選択)

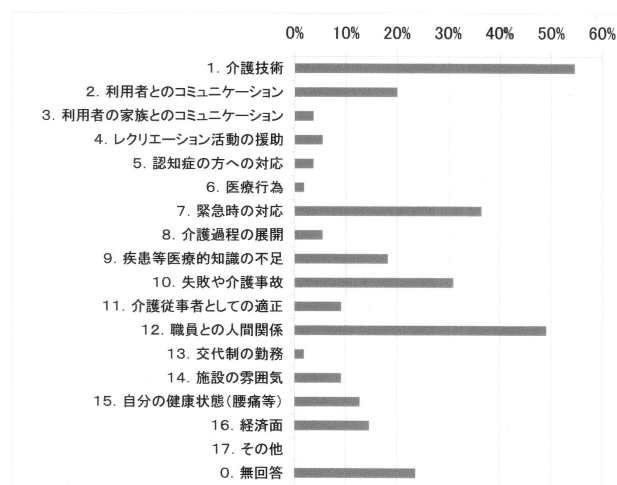


図4. 学生の心配や不安の内容(各自3項目選択)

「活かそうと思う」者の理由は、「家のことのためなど機会があれば生かしたい」、「福祉系の就職先なので、相談時や現場で生かしたい」であった。

「活かそうと思わない」者の理由は、「介護に向いていない」、「介護の仕事内容と自分のやりたいこと、向いていることが違う」等であった

考察

卒業を直前に控えた学生に対し、介護観や不安に対するアンケート調査を行なったところ、介護に従事する上で自分が大切にしたいと思うことについての回答では、利用者とのコミュニケーション、介護職員同士の人間関係を選んだ者が多かった。これは介護福祉士の養成教育の中で、一年次に履修する介護概論の段階から、より良い介護を提供するための基盤として、利用者とのコミュニケーションとチームワークが位置づけられていることを反映しているといえる。

福祉士養成講座編集委員会(2005)が編集した介護概論のテキストでは、相互関係に基づく介護の役割として、「介護はすべての人と人との間の関係と同様に、two-way コミュニケーション行為(相互作用)そのものである。介護従事者は、利用者とのコミュニケーションの形成と社会関係を形成する上でのパートナーである。人間関係は人間にとって生きていくためにはなくてはならないものであると同時に、利用者介護従事者との関係をリアルに把握しなければ良い介護は成立し得ない。このように、介護が人間関係形成の基盤の上に成立つものであるため、人との関係を大切にしなければならない」と述べられている。またチームワークの必要性として、「よりよい介護を行なうためにはチームワークに基づいた介護過程が不可欠である。情報収集やアセスメントをチームで行なうことができれば、総合的な視点から介護計画を立案できる」と記載されている。このような指導を受け、学生は実際の現場に出てからもコミュニケーションとチームワークを大切にしていこうと考えたと推測できる。さらに介護実習において利用者との関わりや実際に介護過程を展開していく中で、コミュニケーションとチームワークの大切さを実感した結果であるといえる。このことは、これらを選んだ理由が「利用者との信頼関係を築くのが一番の支援でありそのためにコミュニケーションが大切である」との内容からもわかる。

次いで多くの学生が選んだ、大切にしたいと思うことは、「利用者の個性」、「利用者の生きがい」、「日常生活の援助」、「利用者の生活の中の楽しみ」であった。社会福祉士

及び介護福祉士法における介護福祉士の定義について以前は「専門的知識及び技術をもって、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障があるものにつき入浴、排泄、食事その他の介護を行い、並びにその者及びその介護者に対して介護に関する指導を行なうことを業とするものをいう。」とあったが、この法律は、2007年に改正され、「専門的知識及び技術をもって、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障があるものにつき心身の状況に応じた介護を行い、並びにその者及びその介護者に対して介護に関する指導を行なうこと」と変更された。また学生が介護とは何かを学ぶ時、中村ら(2007)のいうように「介護とは高齢や障害があり、自分らしい生活に不都合を生じた人に対し、社会で自立したその人らしい生活が継続できるように支援することである」と位置づけられ、学生が上記の項目を選んだということは、介護は単に日常生活の支障を補うことではなく、その人らしい生活やその人の尊厳を守る役割があるということの理解の結果であると考えられる。

折茂ら(2000)によると、高齢者の生活の質は、「高齢者の生活に対する高齢者自身の主観的な満足度、幸福感によって評価することが現在のところ妥当と考えられている。つまり「主観的幸福感」が生活の質の中心課題となり、質の高い生活を送るために必要な条件は、健康、経済的基盤、生きがい」となっている。このことから、学生が選んだ、「個別性」「生きがい」「生活の中の楽しみ」は、利用者の生活の質に影響を与えるものであるといえる。

就職先の施設では、自分の大切にしたいと思う介護ができると思うかの質問について「思う」と答えた学生が78.2%であった。これは就職先を選ぶ時に、施設の介護に対する考え方や理念も考慮した結果であると言える。しかし、その理由では「思うと考えなければできないこともできない」、「自分でがんばる」や、「思わない」と答えた者の理由には「古くからのやり方が強い」や、「面接の時点で出来ないと言われた」などがあげられている。このことから、学生自身の意欲とその反面のあきらめが垣間見える。また自分が大切にしたいと思う介護で「利用者とのコミュニケーション」と「日常生活の援助」は就職後も実践可能と考えている。しかし、「利用者の個別性」や「生きがい」については、大切にしたいと考えているが、実践するのは難しいと捉えられているようである。これらのことから、施設において日常の業務として行なわれている日常生活の援助やそのときに欠かせない声かけ等のコミュニケーションについては、実践することは当然のことであるが、利用者の生活の質を左右する「利用者の個別性」や「生きがい」についての援助については、大学では重

要な援助として学んでいるが、施設で実践していくのは難しいと考えられている。このことから、介護の現場と学生自身の理想や大学で学ぶ介護福祉士の役割が乖離していることも推測される。今後利用者の生活の質を向上させるような援助の重要性について、さらに教育を充実させる必要があるとともに、施設で働く職員に対しても研修等が必要である。

日本の平均寿命は男性79.29歳、女性86.05歳(2009年)で、それぞれ世界3位と1位である。多田羅ら(2007)は「平均寿命世界一位の社会とは、世界一多様な健康状態の人たちを包摂する社会である」としている。2007年の社会福祉士及び介護福祉士法の改正の背景をみると、近年の介護・福祉ニーズの多様化・高度化に対応し、人材の確保・資質の向上を図ることが求められているとある。それに伴い、前述のように介護福祉士の定義も改正され、さらに「個人の尊厳の保持」「自立支援」「認知症等の心身の状況に応じた介護」「他のサービス関係者との連携」「資格取得後の自己研鑽」等についても新たに規定されている。介護福祉士の資質の向上は、そこで生活する利用者の生活の質(QOL)の向上に直接結びつくことである。逆に利用者の生活の質を向上させるような介護は質の高い介護であるといえる。QOLの定義については、日野原ら(2005)によると、「現在のところ厳密な意味でコンセンサスをえているとは言えないが、根源的には生命を有する人間がいかにより毎日充実させて満足感をもって生活できるかである」とされている。学生が大切にしたいと回答した生きがいや生活の楽しみは、QOLを向上させる要因になり得るものである。また個別性については、介護福祉士の定義にある、心身の状況に応じた介護であるといえる。

これから介護福祉士として仕事をする上での心配や不安に思うことについては、ほとんどの学生が「ある」と回答し、その内容は、「介護技術」や「職員との人間関係」「緊急時の対応」「失敗や介護事故」「疾患等医療的知識の不足」が多かった。本学のカリキュラムにおいて、介護系の科目は実習も含め、3年の前期でほぼ終了している。その後は社会福祉士の国家試験受験資格取得のための科目が多くなり、介護技術を行なわない期間が長くなる。そのことが卒業時の介護技術への不安につながっているように思われる。また医学一般や形態別介護技術等の科目も2年後期には終了しており、このことも不安の要素となっていると考えられる。

介護労働安定センター(2005)が実施した「介護労働者のストレスに関する調査」の結果によると、介護労働者の85.5%が職場や仕事においてストレスを感じており、ストレスを感じる事柄には「夜勤時に何か起こるのではないかと不安」「仕事の内容のわりに賃金が低い」等が

挙げられている。介護労働者がストレス解消に役立つと考える雇用管理面での取り組みは、94.6%が「介護能力の向上に向けた研修」を挙げているとある。就職して3年未満で離職するものが7割といわれる介護労働業界で、この離職理由に通じる卒業生の心配や不安は、早期に解決できるような取り組みが必要である。そうすることで、就職後のストレスを軽減し、職場への定着につながると考えられる。

学生の回答からは、4年間の養成課程を経て、介護の役割を的確にとらえ、卒業後は現場でそれを実践していくという前向きな姿勢がよみとれる。しかし実習での経験において、これらを実現させるには、人手不足や日々の業務の忙しさ、職員間の人間関係等の難しさも同時に感じているようである。

施設介護において、利用者の生活の質の向上を目指すには、卒業時の介護観をいかに実践できるかに関わっている。しかし就職後の不安に人間関係を挙げた学生がほぼ半数に及ぶことを考えると、この介護観を持ち続けそれを貫くためには、強い意志が必要である。また同時に自身の考えを説明し、他者に伝えられる能力も必要である。

介護観を確立するには、その背景となる、知識や理論そして経験が必要であり、これはカリキュラムに於ける様々な講義と実習、さらには日々の様々な生活体験が基盤となる。また自分の考えを説明し、他者に伝えられる能力については、講義中でのカンファレンスやグループワークを通し、自身の考えを根拠と共に説明できる能力を身に付ける必要がある。学生はこれらの力を培い、介護観を確立し卒業を迎えなければならない。そして、卒業後も学生一人ひとりが自己研鑽を継続できるような適切な卒後教育が必要である。同時に施設側は、個人の尊厳や自立支援、生活の質の向上について理念だけでなく、それを実践に移せるような環境の整備が必要である。これは人員配置や介護報酬等の制度の見直しも同時に求められているということである。

T大学では、介護福祉士の資格取得を目指す学生は、入学時から介護福祉コースを選択することとなっている。つまり入学の時点では、全員が介護に興味関心を持ち、資格取得を目指していたということになる。しかし、卒業時では2割の学生が介護福祉士としては就職せず、さらにそのうち4割弱(卒業生全体の8%)の学生は、介護の資格を活かそうとも思っていない。その理由は、「介護に向いていない」や「介護の仕事内容と自分のやりたいことが違う」等であった。介護コースを希望し入学したことを考えると、学生は入学後の4年間で心変わりがあったことになる。学生にとっては、専門教育を受け、実習を行ない、介護の

仕事を深く知った上での進路の選択であり、自分のやりたいことや適性を見極められたといえる。これは大学生としての4年間という時間的な余裕や、学生生活の中での様々な経験を重ね、自分自身を客観的に見つめた結果でもある。

学生は、様々な科目の履修や実習、大学生活の中での様々な経験を基に、介護観を確立していく。まさに学生個々の介護観は4年間の学びや生活体験の集大成である。今後は、現場に出ることへの不安について調査し、卒業後に必要な支援等を考えてゆきたい。

結論

今回、卒業直前の学生へのアンケート調査を実施し、以下のことが明らかになった。

- 1) 介護の基盤となるコミュニケーションやチームワークを学生は大切であると考え、就職後も十分にできると考えている。
- 2) 利用者の生活の質の向上につながる、個別性や生きがい、生活の中の楽しみについては、大切だと考えているが、実践となると難しいと考えている。
- 3) 就職を前に、学生のほとんどは介護技術などに関して不安や心配事をもっている。
- 4) 就職後の離職につながるストレスとなっている不安や心配事を早期に解消する卒後教育が必要である。
- 5) 卒業時には、自分の介護観を貫く強い意志と相手に説明できる能力が必要である。
そのために、教育課程において、自身の介護観の確立と根拠から説明できる能力を養う必要がある。
- 6) 学生は、入学時の興味関心における進路の選択から、卒業後の進路については、4年間の専門教育を受け、介護について深く理解した上で、自分がやりたいことや自分に合ったことを選択している。

謝辞

アンケートにご協力いただいた学生の皆様に深く感謝いたします。

文献

- 福祉士養成講座編集委員会編(2005):介護福祉士養成講座
11 介護概論, 中央法規, 東京, p63, p214.
日野原重明(監修)(2005):看護に活かす QOL 評価. 中山書店, 東京, p3.
介護労働安定センター(2005):介護労働者のストレス

に関する調査. http://www.kaigo-center.or.jp/report/h16_chousa_02_stress.html

折茂 肇・近藤喜代太郎(2000):高齢者の心と身体. 放送大学教育振興会, 東京, p43.

多田羅浩三・瀧澤利行(2007):健康科学 一人々の健康を支える基盤一. 放送大学教育振興会, 東京, p48.

中村優一・一番ヶ瀬康子・右田紀久恵監修(2007):エンサイクロペディア社会福祉学. 中央法規, 東京, p728.

Importance of the Pre- and Post-graduate Education for Care Workers from the View Points of the Survey of Under-graduate Students

Kiyomi YAMASHITA

School of Social Welfare, Tokyo University of Social Welfare (Isesaki Campus),
2020-1 San' o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

Abstract : Quality of life of client is strongly influenced by the quality of care which is dependent on the care-worker's view of care. I surveyed the under-graduate students just before graduation about their view of the care, and anxiety after the graduation. The present survey showed that, although the students understood the importance of severalty, life worth living and enjoyment in the care field, they also considered that the practice might be difficult. These results indicate that the enhancement of the care skill on the basis of evidences in the under graduate education, and post-graduate education to avoid the stress-induced problems such as anxiety and unemployment are required in the field of care workers.

(Reprint request should be sent to Kiyomi Yamashita)

Key words : Student's view of care, Worry about post-graduation, Education of care skill, Improvement of clients' QOL

